十字架の愛と死を見つめて　　マルコ１５章３３－４１節

キリスト者にとって信仰の中心は、主イエス・キリストの十字架です。キリスト教信仰とは十字架のみ私たちの救いであることを信じて生きることです。十字架が救いであるということは十字架について死なれたお方が神の子、すなわち神ご自身であり、人間の罪を担った救い主が死なれたということです。

主イエスが十字架におかかりになる頃にはエルサレム、ユダヤの地域でイエス・キリストの名は広く知られていました。どんなにその名が知られていようと、どんなに残虐な刑罰によって死なれようと、どんなに人がイエス・キリストは偉大な宗教的指導者であり、苦しみを受けて死なれたことを知っていても、だから主イエスは救い主ということにはなりません。主イエスは神と等しい方であり、そのお方が聖書に示された預言の通り、この世に来られ、預言の通り十字架で悲惨な死を遂げられた、さらに言うなら預言の通り復活されたことの故に救い主として信じられるということです。もし、主イエスが神の子であると信じないで、偉大な宗教的指導者であると理解するならば、十字架は救いではなく悲しむべき事件ということになります。キリスト教と同じように、旧約聖書を大切にする一神教にイスラム教があります。イスラム教の人々にとっては、主イエスは預言者の一人でしかありません。ちなみにイスラム教では救いとは死後、楽園と呼ばれるところに行くことですがそこに行けるのは５つの宗教的善行を積んだ男性信者かもしくはジハードによる戦死者になります。又、現在、聖書を用いた新興宗教や、様々なカルトがあります。それらの多くは、主イエスを偉大な人物と認めているかもしれませんが、決して、神であるとは言いません。つまり、主イエス・キリストが神の子であるという信仰が、キリスト教信仰と、その他の宗教の信仰との違いとなるのです。

しかし一人の人間、真の人として世を歩まれた主イエスが、神の子であるということは簡単に受け入れられることではありません。ですから主イエスが神の子であるという信仰の中心は、同時に私たちにとって躓きともなります。それでは、そのような躓きを越えて、主イエスこそ真に神の子であるとの信仰はどのようにして与えられるのでしょうか。信仰は人間の業ではなく、聖霊の御業であると言ってしまえばそれまでですが、聖霊の働きの中で、どのようなことが起こる時に、主イエス・キリストを信じる信仰が与えられるのでしょうか。

聖書には、主イエスのお語りになった教えや説教が記されています。又、行った奇跡や癒しの業も記されています。しかし、そのような主イエスの素晴らしい教えや驚くべき癒しに接することだけで、主イエスが神だという信仰は生まれません。確かに、主イエスのお語りになった言葉の中には、含蓄に富んだ、座右の銘にしたいような言葉が幾つもあります。又、驚くような癒しの御業があります。しかし、聖書の記述によれば、地上を歩んだ主イエスのお姿に接する中で、多くの人々が抱いたのは救い主にたいする畏敬の念ではなく殺意だったのです。どれだけ主イエスの偉大な教えや御業を見ても、そこで、主イエスが神の子だという信仰につながって行ったのではないのです。主イエスが神であるという信仰は、他でもなく、主イエスの十字架の出来事が示される中で、つまり、神の子が死んだという出来事の中で示されるのです。そのような意味で、十字架は、信仰の中心であると共に、信仰の出発点でもあるのです。

私たちを罪から救い、私たちに主イエスこそ神の子であるとの信仰を生む主イエスの十字架、神の子の死とは、どのようなものなのでしょうか。主イエスが十字架で死んだということは、主イエスが苦しみを受けたということに他なりません。十字架とはどのようなものかを知るためには、主イエスのお受けになった苦しみとはどのようなものなのかを知ることでもあるのです。主イエスが十字架で受けた苦しみとは、ローマによって行われた十字架刑という残虐な刑罰によって肉体的に苦しめられたということ

ではありません。もし、そのような肉体的な苦しみだけを見つめるならば、主イエスの死は、私たちの救いと言いうるようなものではなかったでしょう。残虐な刑罰から来る肉体的苦痛ということだけを見つめるならば、主イエスの両隣にいた二人の犯罪人も、主イエスと同じ苦しみを一緒に受けたことになります。しかし、主イエスが十字架で受けた御苦しみはもっと深い所にあります。それは、３３節に記されている、主イエスが十字架につけられた時の様子を見ることによって分かります。そこで、主イエスは、「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」とお叫びになったのです。『わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか』という意味であるとあります。主イエスは、十字架に至る苦しみの中で、それ程多くのことを語ってはいません。むしろ、沈黙し、ご自身を殺そうとする人々に身を委ねて、神様の御心の実現のために歩んで来られたのです。ここでの叫びには、主イエスの十字架の苦しみが明確に表されています。主イエスの苦しみとは、父なる神によって見捨てられるということであり、それまで結ばれていた神様と主イエスとの間の完全な愛の交わりから切り離されることなのです。十字架の時、全地が暗くなったとありますが、それは、この十字架の時に、真の闇がこの地上を支配したということを表しています。主イエスの苦しみは、この十字架の叫びに集約されていると言っても良いでしょう。

この主イエスの十字架の叫びを聞くとき、この叫びは、実にしばしば、私たちが叫ぶ叫びでもあるということを思わされます。主イエスの十字架の叫びは、詩篇２２篇の詩人の叫びです。１節には、次のようにあります。「わが神、わが神。どうして、私をお見捨てになったのですか。遠く離れて私をお救いにならないのですか。私のうめきのことばにも。」。この言葉は、苦しみの中に置かれた詩人、つまり人間が、神に向かって発しているものです。それも不条理さが問われているのです。主イエスは、この詩篇の言葉をもってご自身の苦しみを表現なさったのです。私たちは、この世で様々な苦しみを経験します。人間関係の様々なトラブルに遭遇します。自然災害に見舞われます。又病を患い、日々肉体の衰えを経験します。死の現実を通して愛する者との別れを経験します。そのような苦しみの直中にある時に、私たちは、正直嘆き、つぶやくことがあります。どうして、私はこのような苦しみに遭わなければならないのか。神は私を見捨てられたのではないかと思うのです。また嘆きとつぶやきと同時に神様、何もしてくれないのですか？と、神を裁く思いもあります

神様どうなっているのですか？　神様どうしてそんなひどいことをされるのですか？　神様あまりではないですか？　私たちはいとも簡単に神を評価し、裁く者となるのです。これが人間の罪の本質です。主イエスの十字架の場面で、その十字架を囲む人々は死に瀕した主イエスの状況そっちのけで神はどんな奇跡を行われるのか？　興味深々と見ているのです。神を求める人間の思いの背後に、神を試す人間の罪があるのです。そしていとも簡単に神をさげすむのです。それこそ人間が、神様の主人になって、神様を支配しようとしているのです。私たち、人間の罪の本質は、真の命の源である神さまとの関係が壊れているということにあります。神様との関係が転倒してしまっているとも言えます。

十字架上における、「神はなぜ私を見捨てたのか」とのことばについて、私たちが神様から見捨てられたと叫ぶことと、神の子である主イエスが、「なぜわたしをお見捨てになられたのですか」と叫ぶことには根本的な違いがあります。主イエスは、ご自身、神であり、何の罪も犯していないのにもかかわらず、神に見捨てられたのです。これこそ不条理です。そして、十字架において神の子が人間の裁きに合うということを通して、根本的には罪人を裁く、神の裁きをお受けになったのです。神様は、罪人の罪を見過ごすことはない義なる方です。そのような意味で、罪人をしっかりと裁くお方です。しかし、同時に、神さまは、その愛故に、人間を救おうとされる方です。人間を裁く神と人間を救う神が葛藤されているので

す。このお一人の神が、ご自身の中での葛藤の結果が、主イエス・キリストの十字架の苦しみなのです。それこそが、罪に対する裁きを確かに実行しつつ、人間の救いを成し遂げてくださった神様の救いのご計画なのです。主イエスの十字架には、神様の裁きと救いが同時に表されているのです。十字架上の主イエスの死は純粋な神の私たちにたいする愛なのです。

私たちの根本的な苦しみは、主イエス・キリストの十字架によって取り除かれています。それ故に、どのような苦しみも、私たちを絶望に至らせるものではありません。苦しみの中にあって、尚、神を見つめることが出来るのです。

主イエスが苦しまれることによって、神と人間の間の隔たりを取り去ってくださった。そのことを示される時に、真にこの人は神の子であるとの告白が生まれます。ローマの百人隊長によって「この方はまことに神の子であった。」という告白がなされました。彼は信仰深かったわけではありません。むしろ信仰からは最も遠い者であったと言えます。彼にとって、主イエスは、自らが侮辱し、暴行を加え、十字架に付けた人でしかありません。主イエスが十字架の苦しみを経験する一部始終を最もそばにいて見ていた人です。彼が最後「この方はまことに神の子であった」と告白する時に同時にまことの神の子に激しい暴行を加え、傷つけている自分は何者なのか？　私は自らが死をもって支払わなければならないほどの罪びとであるということが分かったのです。この百人隊長はまさにイエス・キリストを十字架につけたのは私だ。すなわち私の罪がイエス・キリストを十字架につけることになり、その私の罪を赦してくださるためにイエス・キリストが十字架で死んでくださったことが分かり、イエス・キリストが救い主であることを深く理解したのです。「この方はまことに神の子であった。」との告白、つまり「主イエス・キリストこそ私の救い主である」との告白が正しくできるためには自分には救いが必要、それはあまりにも自分の罪が大きくて赦してほしいという思いが強くないとできないことです。自らの罪の自覚が無い人にいくら罪の赦しと救いが語られても耳を素通りするだけです。

主イエスが十字架にかかられて死んでくださったこと。そこに私に対する神の愛を感じるなら、主イエスと私はつながっています。すなわち主イエスは私の救い主であるということです。この週も十字架上の主イエスの死を見る時、神の愛を深く感じて歩んでゆきたいと思います。